

## 化学物質の内分泌かく乱作用に関する国際協力関係事業について

環境安全課

## 1. 国際シンポジウム専門家向けプログラムについて

別添資料1：

第8回化学物質の内分泌かく乱作用に関する国際シンポジウム専門家向け  
チラシ

## 2. 日英共同研究について

平成11年3月に開催されたG8環境大臣会合の際、当時の真鍋環境庁長官と英国ミーチャー環境大臣との会談において、先進的な研究実績を有する両国間で化学物質の内分泌かく乱作用について共同研究を実施することが合意され、同年12月に日英共同研究の実施取り決めが締結された。この実施取り決めに基づいて、平成11年度から平成15年度までの間、共同研究が実施され、各研究の結果については毎年開催されたワークショップ（平成11年度神戸、平成12年度プリマス、平成13年度つくば、平成14年度ヨーク、平成15年度熊本）において発表・協議がなされた。また、毎年3名の日本側研究者が渡英し、情報や技術の交換が行われた。

平成16年度には、5年間の区切りを迎え英国側と協議し、日英共同研究の実施取り決めの今後5年間の延長を決定し、平成17年1月英国グラスゴーにおいて開催された第6回日英共同研究ワークショップにおいて、日英共同研究の実施取り決め延長調印式を行った。

平成16年度からは今後5年間の中長期的研究方針として以下の4つの明確な研究テーマを設定した。

- (1) 魚類精巣卵の誘導機構解析
- (2) 排水由来エストロゲン作用の効果評価に関する研究
- (3) イトヨを用いた内分泌かく乱作用が疑われる物質の評価手法の研究
- (4) 両生類の生態影響評価手法の研究

また新たに、研究統括責任者として両国各一名ずつの「supervisor」を指名することとした。両国政府により、日本側 supervisor には自然科学研究機構井口泰泉教授、英国側 supervisor にはエクセター大学 Charles Tyler 教授が任命された。

### 3. 日韓共同研究について

平成 13 年 4 月の日中韓 3 カ国環境大臣会合開催時に、川口環境大臣と韓国金明子（キムミョンジャ）環境部長官による日韓バイ会談が行われ、内分泌かく乱作用を有する化学物質（ダイオキシン類や PCB 等を含む）について共同研究を実施することが合意され、共同研究の実施取り決めが締結された。以後、共同研究を実施するとともに、日韓両国において毎年交互にシンポジウム及び行政官会議を開催してきた（平成 13 年度ソウル、平成 14 年度つくば、平成 15 年度済州島、平成 16 年度福岡）。

平成 17 年 1 月福岡において開催された第 4 回日韓共同研究シンポジウムと第 4 回日韓行政官会議において、平成 17 年のワークプランとしては、

- (1) ダイオキシン類及び他の POPs 測定法のハーモナイゼーション
- (2) 魚介類におけるダイオキシン蓄積量の比較
- (3) 野生生物のモニタリング方法の標準化：POPs 及び POPs 候補物質による  
韓国及び日本近海の生物汚染の  
実態解明
- (4) ダイオキシンインベントリー技術の比較研究
- (5) メダカを使用した試験方法の開発
- (6) 有機スズによる海洋汚染と巻貝類への影響に関する研究

の 6 課題を採択することで両国が合意した。また、今後はより一層 POPs モニタリングを推進していくことが確認された。

### 4. 日米二国間協力について

平成 16 年 1 月、東京において、環境保護に関する日米合同企画調整委員会第 12 回会合が開催され内分泌かく乱作用を有する化学物質に関する研究について、以下のように合意された。

- ①日米両国は、内分泌かく乱作用を有する化学物質に関する研究における協力を継続する。
- ②日米両国は、内分泌かく乱作用を有する化学物質のスクリーニング及び試験方法検証における二国間の協力を進める。

また、平成 16 年 4 月の、米国環境保護庁レビット長官と環境省小池大臣との会談の際にも、化学物質の内分泌かく乱作用問題に関して、日米両国が一層協力して研究を推進していくことが確認された。

平成 16 年度から、両国間の科学的知見交換を目的とし、化学物質の内分泌かく乱作用問題における日米二国間協力の枠組みを構築した。具体的課題は、メダ

カを用いた試験法開発（ライフサイクル試験と二世世代試験の比較）、両生類や無脊椎動物を用いた試験法開発である。平成16年9月東京において第1回、平成17年6月ハワイにおいて第2回実務者会議を開催した。

## 5. OECD への協力について

別添資料2：OECDにおける試験法開発・検証の取組

# 第8回 化学物質の内分泌かく乱作用 (いわゆる環境ホルモン作用) に関する国際シンポジウム2005

▶ 2005年12月4日(日)～6日(火)

▶ 沖縄ハーバービューホテル  
▶ 沖縄コンベンションセンター

■主催 環境省 ■後援 沖縄県、沖縄県教育委員会、那覇市、宜野湾市、本部町

*International Symposium on Endocrine Disruption 2005*

## 一般向けプログラム

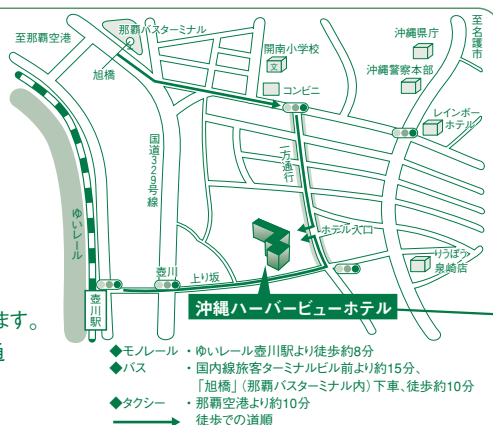
2005年12月4日(日)  
沖縄ハーバービューホテル

〒900-0021  
沖縄県那覇市泉崎2-46  
TEL: 098-853-2111

URL: <http://www.harborview.co.jp/>

▶ アクセスはホームページでもご覧いただけます。

※12月4日当日は、那覇マラソンのため交通規制が行われますので、ご注意ください。



- ◆モトール・ゆいレール 壺川駅より徒歩約8分
  - ◆バス ・国内線旅客ターミナルビル前より約15分、「旭橋」(那覇バスターミナル内)下車、徒歩約10分
  - ◆タクシー ・那覇空港より約10分
- 徒歩での道順



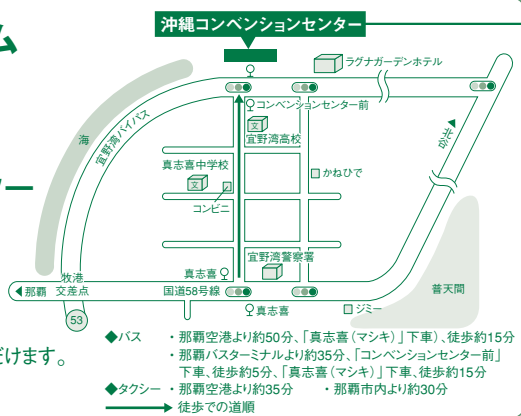
## 専門家向けプログラム

2005年12月5日(月)  
6日(火)  
沖縄コンベンションセンター

〒901-2224  
沖縄県宜野湾市真志喜4-3-1  
TEL: 098-898-3000

URL: <http://www.oki-conven.jp/>

▶ アクセスはホームページでもご覧いただけます。



- ◆バス ・那覇空港より約50分、「真志喜(マシキ)」下車、徒歩約15分
  - ・那覇バスターミナルより約35分、「コンベンションセンター前」下車、徒歩約5分、「真志喜(マシキ)」下車、徒歩約15分
  - ◆タクシー ・那覇空港より約35分 ・那覇市内より約30分
- 徒歩での道順

## 参加申込方法

① インターネットからの申込み  
シンポジウムのホームページから、直接お申込みください。  
<http://www.congre.co.jp/eed05/>

② FAX、はがきでの申込み  
氏名、住所、電話、FAX番号、参加希望日を明記の上、下記運営事務局(株式会社コングレ内)宛にお申込みください。

◎ 参加費は無料です。

〈参加申込締め切り〉  
平成17年11月18日(金)

(申込み多数の場合は、先着順となります。)

\*開催日によって会場が異なりますのでご注意ください。

## 参加申込み・お問合せ

株式会社コングレ内

「第8回化学物質の内分泌かく乱作用に関する国際シンポジウム」運営事務局

〒102-8481 東京都千代田区麹町 5-1 弘済会館ビル 6F

TEL: 03-3263-5394 FAX: 03-5216-5552

E-mail: [eed05@congre.co.jp](mailto:eed05@congre.co.jp)

## シンポジウムの内容に関するお問合せ

環境省総合環境政策局環境保健部環境安全課

〒100-8975 東京都千代田区霞が関 1-2-2

TEL: 03-3581-3351(内線6354) FAX: 03-3580-3596

E-mail: [eri\\_muto@env.go.jp](mailto:eri_muto@env.go.jp)

# プログラム

Program

## 一般向けプログラム

<b>12/4 (日)</b> 沖縄ハーバービューホテル	14:00	●開会挨拶
	14:30	●パネルディスカッション 「今、自然界で何が起こっているのか?~内分泌かく乱作用から生態系をどう守っていくか~」 コーディネーター: 北野 大(淑徳大学)
	16:00	「野生生物にどんな変化が起きているのか?」、「どんな物質が内分泌かく乱作用を持っているのか?」について、最新の報告をもとに話し合い、さらに、「どうすれば生態系を守ることができるのか?」について提言していきます。

## 専門家向けプログラム

※日英同時通訳が入ります。

<b>12/5 (月)</b> 沖縄コンベンションセンター	9:30	<b>セッション1 「疫学研究における問題点」</b> コーディネーター: 遠山 千春(東京大学)
	11:45	環境化学物質の疫学データ解釈の際に必然的に伴うかく乱要因の問題、感受性が高いゆえに特別の関心を払うべき小児の健康影響の大規模コホート研究の戦略について、日米の第一線で活躍する研究者を招き、議論を深めていきます。
<b>12/6 (火)</b> 沖縄コンベンションセンター	13:00	<b>セッション2 「リスクコミュニケーション: 現状と課題」</b> コーディネーター: 内山 巖雄(京都大学)
	15:15	リスクコミュニケーションの概念は、その意図するところが専門家の間においてもまだ十分に共有されていません。今回は、リスクコミュニケーションの発展に指導的な役割を果たしている方々から、化学物質に限らず総論的観点より、歴史的展望、現状と課題についてお話しいただき、リスクコミュニケーションについての理解を深めていきます。
<b>12/5 (月)</b> 沖縄コンベンションセンター	15:30	<b>セッション3 「群集レベルまたは生態系レベルでの人間影響評価」</b> コーディネーター: 花里 孝幸(信州大学)
	17:45	生物群集は生き物たち相互の微妙な関係によって維持されていますが、その関係は、漁業を目的とした放流や、環境中への化学物質の排出といった様々な人間活動によってかく乱されています。このかく乱に注目し、生態系に及ぼす人間活動の影響を考えていきます。
<b>12/6 (火)</b> 沖縄コンベンションセンター	9:30	<b>セッション4 「内分泌かく乱作用解明の新たな切り口」</b> コーディネーター: 渡邊 肇(自然科学研究機構)
	11:45	化学物質の内分泌かく乱作用については、化学物質のホルモン受容体への作用を中心に研究が進められてきましたが、ホルモン受容体以外の作用点も明らかになりつつあります。内分泌かく乱作用を細胞、分子レベルで明らかにするための取り組みについて最新の研究成果を紹介いたします。
<b>12/6 (火)</b> 沖縄コンベンションセンター	13:00	<b>セッション5 「内分泌かく乱作用に関する試験法開発」</b> コーディネーター: 井口 泰泉(自然科学研究機構)
	15:15	経済協力開発機構(OECD)を中心に、ラット、鳥類、両生類、魚類、無脊椎動物を用いた試験法、化学物質の定量的構造活性相関、 <i>in vitro</i> での受容体結合試験等が開発されています。試験法開発の進捗状況および今後必要と思われる試験法についてこのセッションでは論議します。
<b>12/6 (火)</b> 沖縄コンベンションセンター	15:30	<b>セッション6 「化学物質のリスク評価に関する最近の動向」</b> コーディネーター: 白石 寛明(国立環境研究所)
	17:45	化学物質のリスク評価のためには、総合的な有害性評価、及び暴露評価が必要です。有害性評価においては、内分泌かく乱作用のみではなく、様々な作用を考慮する必要があります。このセッションでは、化学物質全般のリスク評価に関して、諸外国での取り組み等、最近の動向を紹介していきます。

## 招聘スピーカー(予定)

Speakers as of September 30, 2005

<b>Patric Amcoff</b>	OECD VMG-non animal Secretariat	<b>Karen Whitby</b>	EPA, USA
<b>David Bellinger</b>	Harvard Medical School, USA	<b>Peter Wiedemann</b>	Federal Research Center Juelich, Germany
<b>Brenda Eskenazi</b>	University of California, Berkeley, USA	吉川 肇子	慶應義塾大学
<b>Anne Gourmelon</b>	OECD VMG-eco Secretariat	崎田 裕子	ジャーナリスト・環境カウンセラー
<b>Thomas H. Hutchinson</b>	AstraZeneca R&D, UK	須之部友基	千葉県立中央博物館
<b>Sean Kennedy</b>	National Wildlife Research Center, Environment Canada, Canada	徳田 雅明	香川大学
<b>William Leiss</b>	University of Calgary, Canada	森下 哲	環境省化学物質審査室長
<b>Mike Roberts</b>	DEFRA, UK	安間 繁樹	農学博士
<b>Charles Tyler</b>	Exeter University, UK	山本精一郎	国立がんセンター

# 【OECDにおける試験法開発・検証の取組】

H17第2回化学物質の内分泌かく乱作用に関する検討会  
05.10.31

資料7 (別添資料2)

